

## 〔61〕 第10回 世界バレエフェスティバル

### ～バレエの現代史に感じる時間的奥行き～

2003年87月16日 東京新聞 夕刊

「こんな公演が見られるのは東京だけだ」

幕間のひととき、世界中を歩いているバレエ関係者が言った。パリにも似たような公演はあるが、しかし企画の大きさや趣向で、世界バレエフェスティバルには遠く及ばない。

規模とえば、歴史の古い大バレエ団はもちろん、個性的な振付家で知られるカンパニーも、そのほとんどが代表選手を送っている。あたかもバレエ界のオリンピックといった趣。東京にいながらにして、世界のバレエ状況を肌で感じることができる。

その世界バレエフェスティバルも今年も節目の第十回である。三年に一度の開催だから、もはや二十年近い。ここで上演された演目リストがそのまま二〇世紀後半からのバレエ史を集約していると言っている。

では趣向はどうだろうか。総勢三十人のスターダンサーが出演したAプロ、Bプロについて、「競演」「発見」「熱狂」という三つのキーワードで考えてみよう。

「競演」とは、ただスターがそろっているというだけではない、同じ作品が演じるダンサーによ

## [61] 第10回 世界バレエフェスティバル

### ～バレエの現代史に感じる時間的奥行き～

2003年87月16日 東京新聞 夕刊

って彩りを変える面白さでもある。たとえばフォーサイス振付の『イン・ザ・ミドル・サムホワット・エレヴェイテッド』を、Aプロではホジキンソン（カナダ・ナショナル・バレエ）とボツレ（ミラノ・スカラ座バレエ）が官能的に艶っぽく、Bプロではシュツットガルト・バレエの若いカップル、アマトリアンとフォーゲルが過激でシャープに踊ったが、同じ動きがまったく違う肌合いになった。

またバランシンの『チャイコフスキー・パ・ド・ドゥ』も、Aプロではコジョカル（英国ロイヤル・バレエ）とコレーラ（アメリカン・バレエ・シアター）が弾ける明るさを振りまき、Bプロではヴィシニョーワ（キロフ・バレエ）とマラーホフ（ベルリン国立歌劇場バレエ）のゴールドン・カップルが至芸のゆとりを見せる。踊る人によって振付が微妙に趣を変えるのが見どころだ。

かと思えばAプロでポリショイ・バレエのフィリンとアレクサンドロワが懐かしくも典雅なラヴロフスキー版『ロメオとジュリエット』（一九四〇年初演）の「バルコニーのパ・ド・ドゥ」を踊り、Bプロではハンブルク・バレエのアッツォ

## 〔61〕 第10回 世界バレエフェスティバル

### ～バレエの現代史に感じる時間的奥行き～

2003年87月16日 東京新聞 夕刊

ーニとリアプロがノイマイヤー版（一九七一年初演）の寢室の場面で大胆な現代性を感じさせる。国柄やバレエ団の個性とともに、バレエの歴史という時間的な奥行きも見えてくる仕掛けである。その一方で、予想もしなかった斬新な作品に出会うこともある。過去の世界バレエフェスでも、バレエのイメージをくつがえすような幾多の作品に出会うことができたが、今年のヒットはバランキエヴィツチ（シュツットガルト・バレエ）がBプロで踊った『レ・ブルジョワ』（コーウェンベルグ振付）。諧かいぎやく謹きん的なシャンソンに乗せた動きの面白さで、バレエの表現をまた一回り大きくした。また同じBプロのホジキンソン、ボツレによる『夏』（クデルカ振付）も、おとな向けの恋愛映画を見るような粋なムードだ。どちらもまだまだあまり知られていない振付家である。

全体のプログラム構成を見ても、ペロー、プティパ振付の定番は別として、以前は新奇に見えたノイマイヤー、キリアン、フォーサイスの作品が、今や中心的な存在として堂々とその真価を發揮した。明らかに世界のバレエの潮流は変わりつつある。

## 〔61〕 第10回 世界バレエフェスティバル

### ～バレエの現代史に感じる時間的奥行き～

2003年87月16日 東京新聞 夕刊

しかし、この企画の最大の主役は「熱狂」ではないだろうか。いや勝る観客の感動と出演者たちのライバル意識が相まって、会場のボルテージはどんどん上がっていく。そんななか、鮮やかな妙技の数々をきっかけに、拍手とブラボーが舞台と客席を一つの渦に巻き込んでしまふ。バレエのテクニツクは観客の心を燃え上がらせる瞬間の火花。そのために、スターダンサーは技を磨くのだろう。

では、今年の三十演目のなかで最高の舞台を挙げるとしたら、どれだろうか。一つにしぼるのはどうにも難しいので、三つを選んだ。

一つはパリ・オペラ座のデュポンとルグリが踊った『小さな死』（キリアン振付）。二つの肉体が精巧なパズルのように絡み合い、一瞬の緩みも許されない緊迫した動きの連鎖のなかに、モーターの静謐な情感がみなぎって、男性と女性の究極の合一が描き出された。振付も演技もこれ以上は望むべくもない、きわめて完成度の高い舞台である。

もう一つはギエム（英国ロイヤル・バレエ）とル・リッシュ（パリ・オペラ座バレエ）によるマクミラン振付『マノン』の「沼地のパ・ド・ドウ」。

## 〔61〕 第10回 世界バレエフェスティバル

### ～バレエの現代史に感じる時間的奥行き～

2003年8月16日 東京新聞 夕刊

死に瀕したマノンの全身から力が抜ける。と次の瞬間には張りつめて新しい流れに入る。その稲妻のような動きの鋭さは息を呑むばかり。ギエムを宙に投げ上げてキリのように回転させるル・リツシュは、悲しみの絶叫の体現そのものだ。目を疑うばかりに壮絶で悲痛な感動だった。

そして最後の花は今回初登場のダンサー。いずれもまだ二十代のコジヨカル（英国ロイヤル・バレエ）とコレーラ（アメリカン・バレエ・シアター）である。Bプロのトリで二人が踊った『ドン・キホーテ』のグラン・パ・ド・ドゥは、若さと愛らしさ、抜群のテクニックで、世界バレエフェスならではの盛り上がりを見せた。彼らがベテランになるころ、世界にはどんな作品が生まれ、バレエはどうなっているのだろう。未来への期待をふくらませずにはいられない至福の時だった。

【1日（Aプロ）、8日（Bプロ）、東京文化会館】